神奈川県立
公文書館だより

第52号
編集発行　神奈川県立公文書館
〒241-0815　横浜市旭区中尾1－6－1
電 話 045（364）4456
FAX 045（364）4459
https：//archives.pref.kanagawa.jp/
休館日：月曜日、祝日（月曜日と重なる場合は翌日）、年末年始（12月28日から1月4日）

令和六年度 アーカイブズ講座
「アーカイブズdeファミリーヒストリー」
令和六年十一月三日

■はじめに

「ファミリーヒストリー」という言葉、近年テレビ番組や書籍等様々な媒体で耳や目にすることが多くなりました。当館でも、「先祖の歩みを知りたいが関連する資料はないか」「どのようにファミリーヒストリーを調べたらよいか教えてほしい」といった利用者の皆さんからのお問合せをしばしばいただきます。また、毎年秋に開催している本講座の受講者アンケートでも、「ファミリーヒストリーの調べ方を扱ってほしい」という声が多く寄せられて来ました。

そこで、令和六年度の本講座では、「アーカイブズdeファミリーヒストリー」と題し、ファミリーヒストリーの調べ方の基本から、公文書館の利用法、また、公文書館ではどのような資料を収蔵しているのか、公文書館の職員が自らのファミリーヒストリーを調べた経験を交えながら、講義形式でお話ししました。以下、ごく簡単ではありますが、当日の講義内容を紹介します。



本講座のポスター

■ファミリーヒストリー調査の基本

本講座の受講をきっかけに初めてファミリーヒストリー調査に取り組まれる方も多いであろうことを考え、まずは調査の基本的な流れを説明しました。ファミリーヒストリー調査は、①戸籍の収集、②聞取・現地調査、③文献調査（図書館等）、④文献調査（アーカイブズ機関等）の四つの調査を組み合わせながら進めることになります。

最初の関門は、①戸籍の収集です。戸籍（除籍謄本）には現代では使われていない異体字や変体仮名が使われていたり、地名等も大きく変わっていたりする場合があり、その収集と読解に苦労することも多いでしょう。ある程度戸籍を集めたら、それをもとに家系図一覧表等を作ってまとめておくと、後々の調査に有益です。

講義の中ではあまり時間を割きませんでしたが、聞取・現地調査は、戸籍に記録されていない情報を入手するという、その後の文献調査の成否に関わる重要な工程です。記録を探す上では、調査対象の人物の「社会とのつながり」を探すことが重要で、学歴・職歴や居住地、あるいは趣味や特技など、些細なことでも積極的に情報を集めておくことをお勧めしました。

また、アーカイブズ機関を利用する前に、図書館等で十分に調べておくことも重要です。本講座では、インターネット上の様々な調査ツールや調査に役立つ辞書・参考図書も紹介しました。

■アーカイブズ機関における ファミリーヒストリー調査

本講座は、公文書館の意義と役割、またその利用法を一般の方に知っていただき、受講後に利用していただくことを目的としています。そこで今回は、アーカイブズ機関の利用に際して必要となる予備知識について、特に重点的に説明しました。「アーカイブズ」とは何かといった基本的なお話から、当館を例にアーカイブズ機関の機能と役割について述べるとともに、アーカイブズの専門職「アーキビスト」を紹介するなど、秋の良き日にお越しいただいた五十名超の受講者の皆さんに、まだまだ巷間に知られていないアーカイブズの世界を覗き見ていただきました。

続いては、日本にはどのようなアーカイブズ機関があるのか、またその利用法と資料の調べ方、ファミリーヒストリー調査に活用できる主な収蔵資料（「在外私有財産実態調査票」等）などについて、当館を事例に紹介しました。



講義風景

ファミリーヒストリー調査の過程では、御実家等から古い文書資料や写真等が発見される可能性も大いにあります。アーカイブズ機関のような施設で保存されている資料だけでなく、そうした各家に伝来した資料も地域の歴史やファミリーヒストリーを明らかにしていく上でかけがえのない貴重な資料です。「汚い」「読めない」「わからない」からといって安易に捨てず、ぜひ大切にしていただきたいと思います。

■ファミリーヒストリー調査 わたしの実践

講師を務めた筆者も自らのファミリーヒストリーを調べ、講義の中でその結果を発表しました。紙幅の都合上、ここで具体的に紹介することはできませんが、いくつか例を挙げれば、大要次のようなことが明らかになりました。

・ある藩の由緒書から約五百年前まで先祖を遡ることができた
・高祖父が戊辰戦争に従軍し、その記録を国のアーカイブズ機関が所蔵していた
・明治時代に教員を務めていた高祖父の勤務成績が、ある県に歴史的公文書として残っていた
・戸籍の断片的記述から、日露戦争従軍後、朝鮮総督府に技師として勤めた先祖を探し当てることができた
・一枚の古写真から、祖父が盧溝橋事件の現場にいたことが判明
・母の実家にあった家系図とアーカイブズ機関の所蔵資料を突合したことにより、家系図の記述に怪しい点が見つかった
・元々神奈川県とはゆかりのない筆者でも、当館収蔵資料に先祖の関連資料があった
・一方で、皆目手がかりのつかめない家系もあった

■おわりに

今回の講座を通して、日ごろアーカイブズ機関の「中の人」として働く筆者にとっても、改めてアーカイブズ機関の利用者となることによって、多くの発見がありました。とりわけ強く感じたのは、アーカイブズの世界の「豊かさ」です。様々な機関と様々な資料が、「利用」という出会いを待っています。先祖の記録が必ず見つかるとは限りませんし、調査は簡単ではありませんが、ファミリーヒストリー調査をきっかけに、皆さんもアーカイブズの豊かな海へ漕ぎ出しませんか。皆さんの御来館・御利用を心よりお待ちしています。

（資料課　関根豊）

企画展示「公文書館資料にみる女子教育」

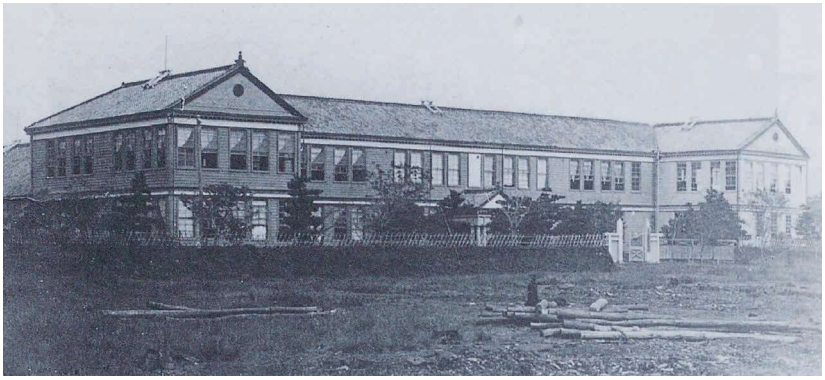
令和七年一月二十四日～三月三十日



展示室の様子

わが国では、明治時代に入り、女子教育の必要性が唱えられるようになりましたが、その歴史をたどると現在に至るまでには様々な変遷を経てきたことがわかります。それは決して制度的に均一化された、単線的な歴史ではなかったようです。皆さんが住まわれる各地域ごとに、また時代によって独自の歴史をあゆんできたのです。

本展示では特に神奈川県の公立女学校を取り上げて、時には生みの苦しみがあり、あるいは戦争の時代を生き、戦後の学制改革や共学化への道に揺れつつ今の時代へとあゆみつづけてきた、女子教育の歴史を紹介しました。



明治34年創立
当時の神奈川県立高等女学校

女学校は当時の義務教育期間であった小学校を卒業したあと、満十三歳から通う四年制（科や時代により異なります）の学校です。本県では、明治三四（一九〇一）年四月に、県内最初の公立女学校となる「神奈川県（立）高等女学校（のち県立横浜第一高等女学校と改称、現在の県立横浜平沼高等学校の前身）」が開校しました。以後、昭和初期までに県内各地で公立女学校が設立され、その多くは皆さんがよく知っている、現在の各県立高等学校へとつながっていきます。

しかし、当初は地域の状況や経済的な理由により、郡立や複数町村の組合による設立、地元の有志らによる私立に端を発する女学校、校舎の代わりにお寺の本堂を間借りするなど、多種多様なあり方でした。また、女学校自体も今でいう普通科以外に家政科を専門とした「実科女学校」もあり、当時の女子教育は家事・裁縫が中心という観念が強かったようです。

太平洋戦争がはじまると、次第にこうした女子教育のあり方に変化が起きます。まず教科としては、理系が重視されました。これは昭和一六（一九四一）年「通常県会議案原稿」（県会 1941-4）によれば、「国防の充実、産業進展の基礎をなす理科教育」が「女子教育においても緊要」とされ、科学的知識が男性不在の家庭のなかで必要とされたことによります。

また、国民総動員という戦時体制下で、軍需工場での労働力として、産業技術の習得が必須とされ、紡績関係や電気通信関係企業などが私立女子青年学校を設立し、その育成にあたりました。



勤労奉仕に動員された県立上溝高等女学校生（昭和19年）

戦後はＧＨＱ主導の教育改革により、同二三（一九四八）年四月に「新制高等学校」が設置され、旧高等女学校は再編・統合され、多くの旧女学校が共学化していきますが、一方で女子校として名残をとどめ、または共学化したあと再度女子校にもどるなど、各地によって様々な受け止め方がなされました。

こうした女子教育の歴史の一部を見ただけでも、県内各地域のオリジナリティーがみられ、県内在住あるいは卒業生の方々には、あらためて新鮮な気持ちでご覧いただけたかと思います。

（資料課　山本順也）

令和六年度
収蔵資料展示

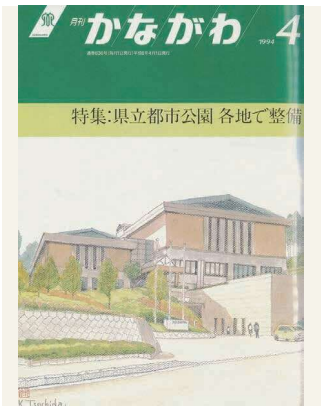
「神奈川の風景の記憶
―『月刊かながわ』表紙絵 土田邦彦原画展―」

前期：令和六年十月二十五日～十一月二十二日
後期：令和六年十一月二十四日～十二月二十二日

本年度二回目の収蔵資料展示として、当館の収蔵資料の中でも、特に「変わり種」と言える「水彩画の原画」が展示ケースの中を埋めつくしたユニークな展示をご紹介します。

展示された水彩画は、一九八八年から一九九四年まで、ちょうど昭和から平成に変わる時期の約六年間、神奈川県が刊行していた広報雑誌『月刊かながわ』の表紙を飾った絵の原画です。今回の展示では当館が所蔵する八十一点の内五十三点を公開しました。

作者の土田邦彦氏は新潟県長岡市の生まれで、日本社会事業大学を卒業後、神奈川県の福祉関係のいくつかの施設・団体に勤務され、神奈川県との縁ができたようです。一九七五年以降は画家として活躍され、二〇一四年五月に八十一歳で亡くなっています。今回、ケース一つを使って、氏のエッセイや自画像、略歴表などを展示し、作者の業績を振り返りました。



『月刊かながわ』表紙

今回、公文書館としては異例とも言える絵画作品メインの展示となりました。今回の資料は、絵画作品として美しい、美的な価値を持っていますが、それに加えて、描かれた風景が、一九八〇年代から九〇年代にかけての神奈川県内の風景の「記録」となっている点にも価値があると言えます。そういった記録資料としての側面、価値を理解していただく意味もあり、二つの工夫を取り入れてみました。

一つは、「風景」を記録する技術として現在一般的な「写真」を対置して、絵画が表現する風景と比較してみることです。

「写真」は、県の広報課が撮影した膨大な写真群（当館所蔵）の中から、原画に描かれたロケーション近傍で撮影された場面等をセレクトしました。さらに、原画が描かれてから三十年近くが経過した現在、かつての風景がどのように変わっているのか、変わっていないのか、近況を写した写真を当館の職員から提供してもらい、原画等と併せて展示しました。

工夫の二つ目は、「描かれた風景にこめられた思い出」を文字化することです。風景には、私達個々人が抱く思い出が詰まっています。その思い出は人さまざま。風景は、思い出の缶詰と言えましょう。その缶詰の中身を文字にして投稿してもらい、これを表紙絵に添えることで、記憶の記録として示し、絵画の記録性、人の記憶を引き出す特性について思いを致していただく趣向を試みました。

なお、今回の展示では、資料保存の観点から、原画の展示期間が一ヶ月を超えないことを方針としました。会期を前期と後期の二つの期間に分けることで、限られたスペースで、すこしでも多くの作品をご紹介することにもなりました。

また折を見て、今回展示できなかった原画をご紹介する機会が持てればと願っています。

（資料課　木本洋祐）

展示のご案内

◆令和7年度収蔵資料展示
5月8日（木）から6月29日（日）

講座のご案内

◆古文書講座入門編（A日程）
5月11・25日、6月1日の各日曜日（全3回）

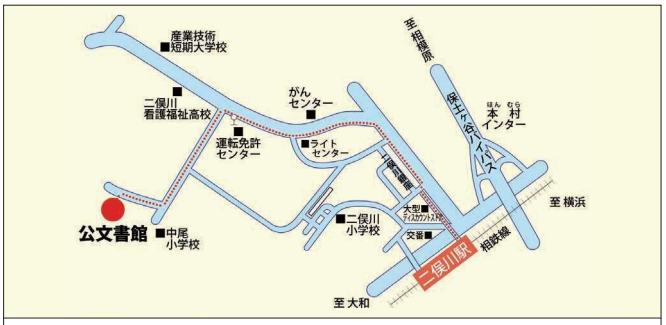
◆古文書講座入門編（B日程）
6月15・22・29日の各日曜日（全3回）

◆夏休み親子講座
7月26日（土）・27日（日）

◆アーカイブズ講座　11月2日（日）

※詳細は後日当館ホームページでお知らせします。

公文書館へのアクセス



電車の場合　相鉄線「二俣川駅」下車、二俣川駅北口より徒歩17分
二俣川駅北口より相鉄バス「旭23運転免許センター循環二俣川駅北口」行きで「運転免許センター」停留所下車、徒歩3分
車の場合　「保土ヶ谷バイパス」本村インターから6分
※駐車スペースが少ないため、できるだけ公共交通機関をご利用ください。